日本聾唖協会

佐藤　聖（新潟県長岡市）

大正４年に「日本聾唖協会」という団体が設立された史実をあらゆる面から詳しく分析してみる。

聾者社会の動き

明治 39 年秋、東京市にて五二共進会の開催を機として、日本聾唖技芸会は、卒業生や在学生が創った美術工芸品を出陳し、社会の注目を惹起させた。聾唖教育講演会開催を機として、聾唖者間に交流・会談を重ね、全国聾唖者団結の機運を醸成した。

大正2年11月1日、東京に聾唖倶楽部が設立。次いで、京都にも同名の団体が誕生。

※日本聾唖技芸会は東京盲唖学校嘱託の彫刻家・青山武一郎氏が主宰していた。

聾教育界の動き

明治39年10月、華族会館において聾唖教育講演会を開催した。そして全国聾唖教育大会開催。東京盲唖学校長・小西信八氏、京都市立盲唖院長・鳥居嘉三郎氏、私立大阪盲唖院長・古河太四郎氏が文部省を訪ね、大臣・牧野伸顕子爵に会見した。

聾者の団体設立へ

大正 3 年春、松江にいる藤本敏文氏・東京にいる三浦浩氏は東京代表・京都代表・大阪代表を各4名選出するなどの事前準備を進めた。平均年齢 28 歳のメンバー。

大正３年７月 22～25 日、日本聾唖協会創立協議委員会は京都市立盲唖院にて行なった。議長に萬澤格氏、副議長に中垣内久次郎氏、書記に福島彦次郎氏・藤本敏文氏・三島邦三氏が就任。

大正４年11月25日午前、日本聾唖協会発会式は京都市立盲唖院にて挙行された。

中垣内久次郎氏が司会を務め、勅語奉読・経過報告・総裁令旨・会長告辞・来賓祝辞・創立委員総代謝辞の順序で進行。午後、日本聾唖協会総会に移り、会務報告・役員選挙を行なった。役員の顔ぶれは次のように決定された。総裁に子爵・山尾庸三氏、会長に東京聾唖学校長・小西信八氏、副会長に京都市立盲唖院長・廣瀬爲四郎氏と大阪市立盲唖学校長・佐藤亀太郎氏、評議員に９名、幹事に４名、名誉顧問に京都盲唖保護院長・鳥居嘉三郎氏。評議員、幹事に聾者が何人か含まれていた。

※子爵・山尾庸三氏は大正６年に81歳で亡くなった。

法人化への動き

大正 14 年８月 10・11 日、東京聾唖学校にて臨時評議員会・臨時総会を開催された。

９月 28 日、文部大臣・岡田良平氏に社団法人設立の申請を提出。12 月 18 日、社団法人設立の許可を得た。「社団法人日本聾唖協会」という名称。役員の顔ぶれは次のように決定された。総裁に子爵・山尾三郎氏、名誉会長に小西信八氏、会長に樋口長市氏、副会長に廣瀬爲四郎氏と高橋潔氏、専務に川本宇之介氏・三浦浩氏・藤本敏文氏、理事に横尾義智氏・中垣内久次郎氏・福島彦次郎氏・三島邦三氏、監事に岡元次氏・横江榮雄氏・福井清一郎氏。役員に聾者もいたことが明らかである。

部会設立の動き

大正 5 年、まず、東京・京都に部会を設置し、翌年、大阪をはじめ、事情により活動ができなくなるまでに全国各地に部会を設置した。当時 2 部会を設置していたのは広島県・兵庫県・愛知県・静岡県・北海道である。

総会開催

当初、不定期に総会を開催されてきたが、協会が法人化してから、毎年1回開催されるようになってきた。東京で開くことが多かった。最北は長岡、最南は福岡で開催された。

ろうスポーツ

協会が法人化したばかりの頃、陸上競技大会が開催されてきた。水泳は随時開催された。

昭和 5 年、体育部新設。あちこちに庭球・弓道・野球がさかんに行われていた。

昭和 9 年、協会が国際聾唖スポーツ連盟に加入したことは驚くべきことである。しかし、14年に脱退した。世界の舞台に登場するまでの道のりは遠くなってしまった。

ろう芸術

昭和6年を皮切りに、東京で「聾唖技芸品展覧会」が開催された。8年、美術工芸部新設。10年、「美術工芸展覧会」と改称し、数回開催された。

参考文献

聾唖界
聾唖年鑑
東京聾唖学校六十年史

聾者の生涯教育

昭和 7 年、社会部新設。9 年、「公民科講習会」を開催された。この会合は聾唖者の知識向上を助長するのに役立ったと思われる。現在、調査中ですので、詳しいことは判らない。

出版物

機関誌として「聾唖界」12～97号（大正5年1月～昭和17年3月）

「聾唖年鑑」は昭和 10 年に発刊された全 840 頁の貴重な大冊である。その後、このような年鑑は一度しか刊行されていない。

機関紙として「聾唖月報」（昭和6年6月～不詳）

協会の終焉

昭和17年4月1日、国策により、協会が解散された。財団法人聾教育振興会、日本聾唖教育会、全国聾唖学校長協会、社団法人日本聾唖協会が統合し、「財団法人聾唖教育福祉協会」として再結成されたわけである。

「聾唖界」機関誌が「聾唖の光」と改称し、刊行された。